

白雲山

卷之三

わが心の遍歴

長與善郎

筑摩書房

わが心の遍歴



昭和三十四年七月十五日 発行

定価 五百六十円

著者 長 与 善 郎

発行者 古 田 晁
東京都千代田区神田小川町二ノ八

印刷者 田 中 昭 三
東京都新宿区改代町二四

発行所 筑 摩 書 房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京(29)七六一(代表)
振替東京一六二七六八

印刷 株式会社理想社
製本 敬製本株式会社

わが心の遍歴

装題
幀簽

著

者

まえがき

本書の誕生の経緯は本文にある通りで、初めは気が進まず、口述で二回雑誌に連載した所、ゲラ刷りの誤りの余りのひどさにいっそ自分で書いた方が早いと思い、書き出したのが意外に油が乗り、創作しているのとおなじ実の入れ方で書き続けた。実伝であるため、最初は僕、僕と第一人称で書き出したのを途中から第三人称の仮名にし、本名そのままの者と仮名の数名とをチャンポンにする変な文体をとった。本書のほとんど過半を占める「ささやかな賀宴」と題した一挿話の部分である。最後に再び第一人称の実伝に戻るのだが、執筆し出した当時は本書中で敵役になっている或る骨肉のモデルがまだ存命中であり、その一女性と同族関係にある人々に露骨に差し障りになることは避けたかったからであるが、それでもそれが誰々ということは大方の読者には容易に想像がつくであろう。そこを憚って割いて了ったのでは「大法輪」の希望する僕の自伝にならないのである。

作家としての僕はそこまでの遠慮の必要を認めない者であるが、もともと自伝である以上、半ばは告白の書とならざるを得ず、そこに多少ヴィタ・セクスアリス的な箇所も入ることを免れなかったが、それを或る程度までで終らせ、それ以上を公にすることはわざと伏せてしまった僕らしい理由は本文に記した。しかし著者が物心ついてからの六十年に亘る身心の問題は多岐多端で、矛盾相剋に充ち、又それが明治・大正・昭和の今日までの日本の歩みと絡まり合っている。といっても、社会主義の見地からい

えば、或る上層階級に属する特殊な性格を持った一個人僕と、その接したグループの変遷の記録ということになるが、同時にそれが人間とはどんなものかという課題の検討にもなることを全然意識しないではなかった。

といつても、人名だけの作爲は加えたにしろ、それ以上に作爲を混えることによって折角の事実の實伝的価値を傷つけることはあくまでも避けたつもりである。又事實は小説より奇なり式に、不思議に国運の大転換などとともに、登場人物の運命もあれこれと思いがけぬ因果の転変を辿ることになっている所は面白いと思つている。もちろん僕はこのあまりにも独自の小自伝によつて、人間とはこんなものだということを記し得たなどと自惚れるものでは毛頭ない。ただ、僕という変な男以外には誰も書かず、又書けないであろうと信じてゐる意味で、本書の上梓は何かの一資料になりはしないか。それなら無意味でないと自負するものである。又そうなれば幸である。

一九五九年六月十五日

長与善郎

外国には、有名ないい自伝が沢山あるが、日本にはなぜか少ないということを聴いたことがある。ぼくも日本人の書いた、はっきり自伝というものは『福翁自伝』くらいのものではないかと思う。

勝海舟の『氷川清話』という本も、自伝といえれば自伝のようなもので、西郷南洲と会見する大芝居の場面があつたりするので、昔面白く読んだけれども、『福翁自伝』のように文章を自分で書いたものではなく、誰かに口述した記録らしく、それにだいたいぶ自慢話めいてもいるのでその点少し気になるが、それはそれとしてともかく面白い。

ところで、ぼくは今まで自伝というものを書いたことがない。極く部分的な思い出を書いたことは何度があるが、生涯を顧みての纏まとまったものは書いたことがない。というのは、僕には他人が読んで面白く感じるような外面的なために現われた事件とか、境遇の変化があまりない。物どころついてから六十数年、来年で七十になる（僕は明治二十一年、即ち一八八八年八月生れだから）わけだが、その生涯は大体にいって外部的には比較的平坦で、事件ももちろんなかったわけではないが、いわゆる立身出世型の波瀾万丈をきわめた奮闘努力、苦学力行というような生涯に比べて単調である。

従って、ぼくの思い出は、心のうちの遍歴が主ということになる。

青年時代にゴリキリーの自伝だか伝記だかを読んで感動したことがある。ゴリキリーが貧賤から身を起して、靴屋の丁稚奉公に入ったり、あるときは、ヴォルガ河の船のボーイになつたりして、戦争に行

ったかどうかは知らぬが、自殺しようとして奇蹟的に助かったり、ともかく、劇的な生涯で、最後はスターリンに毒殺されてしまったらしい噂も聞いたが、それが嘘としてもともかく波瀾曲折に富んでいた。それに書き方も巧いので、面白く読める。

トルストイは貴族の息子だが、この人は戦争に行ったこともあるし、生活の経験も豊かで、いかにもスケールが大きく、華々しい。ゴリキーと同じく自殺の誘惑をしばしば感じ、縄を見るのを自ら避けて逃げたりした。ドストイェフスキーの生涯にしても、動きの激しいもので、革命黨員として囚えられ、銃殺されようとした間際に、皇帝からの中止の命令で危く助かったというような芝居がかりな一幕もあり、貧乏もずいぶんながく続いたらしいし、結婚も二度かくり返した。そのほか、ゲーテにしても、ストリンドベリーにしても、皆外部的にも大変なものであった。

このように考えてみると、そういう意味で文学者としての多くの生涯は、平凡単調、経験の材料も貧弱で、文学として到底強い、いいものは出来なないと思ひ、悲観したこともある。

そういうときにエマースンの伝記を読んだことは、一つの救いであった。エマースンの生涯が、さきに列挙したような波瀾にみちた人々と違い、むしろ反対に、外部的には平凡そのものの坦々たる生涯で、いわゆる事件らしい事件というものはない。にもかかわらず、彼はその内面的な深く豊かな体験を生かして、立派な人間形成を達成したのである。尤もエマースンは前出の人々のように作家ではなく、牧師であったりした関係もあるが、この彼の伝記を読んだ僕は大いに励まされ、外見平凡無事な生涯でも内面的な活き方と充実とによって大したものになることを知った。逆にどんな大きな経験を持っていたても、人によっては何の役にも立たぬ死物であることを感じたわけである。

そのときから、自分を卑下するようなことはなくなったが、それだけに内面がどんなものであるかが

問題だと思ふようになった。それゆゑ、人が読めばつまらぬことであるかも知れぬが、架空の人物——「青沢先生」のように——をもつてきて書いたりもしたが、それもやはり、生活の外観はぼくに似て動きがなく、平淡だ。けれどもまた、ちょっとした事件でも、深刻に感じ、考える人にとってはその人の魂を生涯支配しつづけてゆくものであることはいうまでもない。

これは昔「最初の旅行」という文章に書いたことだが、ぼくの記憶ではぼくが数え年六つ頃のことだったと思う。一番上の姉がよそへ嫁ぐことになった。それがちょうど父のながい間の大患が恢復した時だったので、その二つの記念と祝いの意味を兼ねて一家で伊勢・奈良・京都・舞子というところへ出かけることになった。

ぼくは八人同胞の末っ子で小さく、体も弱かつたため、母がぼくを残してゆくことを心配して一緒に連れてゆくことになり、両親と姉二人にぼくを加えて出発した。どこからどういふふうに行つたか知らぬが、ともかく船で伊勢の四日市か、桑名あたりの浜へ着いた。なんでも船の横っぱらの小さな出入口から揺れるハシケに乗り移つて、浜へ着いたが、茶店のようなところで休み、昼飯を食べた。きつと誰かが迎えに出ていたのだらうと思うが、そのときの海辺の潮のすがすがしい匂いが、強い印象となつて今でも鮮かにおぼえている。

それにもまして忘れられないのは、僕はみんなが茶店で昼飯をとっているあいだに、のこのこと裏の畑に出ていった。とそこは一面に菜種が花盛りで、その匂いと色とが小さな僕をつつんでしまった。僕はその匂いと色とに、ああきれいだ、と愕おどろき、見惚れた。それが僕がこの世で美感というものに強く打たれた最初の経験である。

ぼくが岩波から最初に出した本の名前に『菜種圃』という名をつけたのも、その印象があまりに強か

った記念のためであった。翌日、奈良に行き、嫩草山に上ったが、紫の矢飛白やがすりを着ていた二番目の姉がそこで転んだのをおぼえている。

京都では、御所に行った。その渡り廊下を踏むと板が鳴るように出来ていたのか、それが珍らしくて何遍もトントンと踏み鳴らした記憶もある。その夜であったか、祇園あたりの芝居小屋に連れて行かれた。ところがその芝居が何であったか、人殺しの場面があつて、僕はそれを観て恐ろしさに耐えられず、大ごえをあげて泣き狂い、どんなに宥められてもいうことをきかず、はたの観客にも迷惑なので、ついに根負けした一同は、碌々芝居も見ず、少くとも母と僕とは中途から宿に帰った。

そのころ、十年ものあいだドイツに留学していた惣領の兄称吉が帰朝した。十七の年から十年も外国にいたため、兄はまるで日本人ばなれのした風貌と性格になり、ずい分乱暴だった。日本橋に医院を開いて、毎朝麻布から人力で出かけるのだが、自分の抱えの車夫が自分より一寸でも遅く玄関へくると、ステッキでいきなりその背中を撲った。昔のことだから、そんなことをされても車夫は車のナガエに手をかけてじっとおとなしくしている。私はそのびしゃりという音に驚き、兄を憎んだが、そのくせ兄は帰ってくると、うんと御馳走をしたりする風だった。その長兄がその後間もなく結婚し、僕らは嫂と暮すことになった。

嫂（仮名栄子）はなかなかの美人であった。今まで水入らずだった一家のなかに、はじめて他人が入ってきたので、平穩無事だった家庭がそれ以来、複雑な事情のもとに置かれるようになった。しかし僕は人の容色のよしあしに敏感になった。

又その翌年の夏には、数え年十五であったあの二番目の姉が鎌倉で溺死したという不慮の災難が起った。「亡き姉に」という短篇を『白樺』に初めて載せたほど、この禍は子供の僕にも天地がひっくり返

るばかりの事件でもあった。ともかくそれまでの僕の家は、人にも羨まれるほど、和氣霽々と円満欠ける所のないもので、楽しく美しい霽開気につつまれていた。正月には芝生の庭に母や姉が女中達、書生、車夫などを集めて蜜柑撒きをし、初夏の夜には白薔薇をからませたその六角堂で、三番目の兄又郎がアラビアン・ナイトの話を聞かせてくれたりした。今日港区宮村町の、いま南山小学校の在る地所で、父が当時のハイカラ好みのところから、家の造りも六分が洋館、四分が和風という調子で、着物にしても食物にしても、洋風がかったいた。

藤子の誕生日は知らないが、美しいその友達が多勢来て、春には土筆やすみれを摘んだ光景も忘れられない。このような穏やかに明るい生活の空氣が、一朝にして悲惨の底に落ちたのだから、一家中が真づ暗になってしまったのも止むを得ない。姉の死体は三日目に浮き上ったが、それは水ぶくれして目もあてられぬ状であつた。その頃、一般にはまだ水泳など熾んではなく、せいぜい汀で水に浸り、ポチャポチャやるくらいだったが、西洋かぶれの父が子供の健康のため海水浴を奨励して、鎌倉に別荘を造り、一家は毎年そこへ行つたのだった。母は父の意見を重んじて子供たちに朝早く海へ行く習慣をつけさせていたので、その姉も早朝から海岸へいったが、その日は何か氣がすすまず出渡つていたというのを、母は励まして行かした。

別荘で僕と母と朝飯をたべていると、すぐ上の姉道子が裸足で走つて来て、「ちい姉さまが流された！」と叫んだ。僕達も青くなつてすぐ裸足で飛び降り、浜まで走つていった。土用のこととて、海は表面穏やかでも底の方は強い退き潮で、ぐんぐん流れていたので姉は足をさらわれたのだ。何しろ姉は体がひ弱かつたし、泳ぎも無論ろくに出来なかつた。その時、一人別に材木座の方に泳いでいた兄又郎は、姉よりたつた一つ上だったが、責任を感じ、「阿母さん、御免なさい」と砂の上に手を突いて謝ま

つたが、その後、悲痛のため神経衰弱になり、暫く休まで弱っていた。当時箱根の芦の湖のあの半島の上に元御用邸の造営を監理しに行っていたが、急を聞き、慌てて駆けつけて来た父は、自分の責任だと感じてか、玄関に泣き崩れ、あやまる母を見ると鼻血を垂らしたという。しかし誰にも増して母の悲嘆は深く大きく、死人のように痩せおとろえてしまい、終日、仏壇の前に坐りこんでお経ばかりあげていた。僕はそのありさまが、子供ごろに耐えがたく、心ぼそく、哀しく思われ、母にくつついて坐ったまま、じつと仏壇の奥に見入った。仏壇の奥には位牌の置かれた背面に金の雲が描かれていて、それが蠟燭のあかりにゆらめき光る。母の悲嘆がそのままぼくの小さな胸に伝わって、しゃくりあげる悲しみと心配とに浸ひたされているので、その光りゆらめく金いろの雲が、何かこの世のものとも思えぬものに映った。

戦争で何千何万の人間の命が喪うしなわれてゆくことから考えれば、たかが一人の死ぐらい、なんでもないことかも知らぬが、平穩だった一家にとっては、大変な出来事として深刻痛烈な打撃となった。それまで幸福だっただけ、そのときの不祥事は、いまだに深く頭にこびりついて離れない。

家の墓地はそれまで上野谷中にあったが、姉の骨の埋まった墓へ麻布から人力車で通うのも大へんだし、それに死んだ姉が淋しい思いをするだろうからというので、青山の墓地に移した。そんなことがあってから数年のあいだ、ぼくは病氣ばかりしていた。姉の死ですっかり参ってしまった母は、末っ子のぼくにまで死なれてはたまらぬというので丈夫に育ちさえすれば学校なんかはどうでもいい、ということになり、自然と甘やかされ、十歳位まで朝は母の寢床に抱かれて寝た。

僕の一家に青天へキレキの大打撃を与えた姉の横死した明治二十七年の暮れ、僕は父及び二人の兄につれられて熱海へ行った。父は元来羸弱るいじやくで、病氣勝ちだったが、この年は特に身心弱っていたので避寒

の必要を感じたのだったと思うが、始めて母と別れて父たちと東京を去った僕が、今度は熱海の宿へ着くなり、重い流行感冒（インフルエンザ）に罹った。

何しろ当時は品川から国府津駅まで汽車で三時間、それからたしか鉄道馬車で小田原へ行って、午飯を食い、その間に人力車を五台用意する。そして熱海まで六七里の道を——今の汽車の道とはちがう山の中を縫って行くのに、たっぷり六時間以上かかる。

初めて入る温泉というもののある熱海へ着いたのは、もうまっ暗な七時近くだったと思うが、その途中で僕は感冒をひきこみ、翌日は四十度以上の高熱に昇った。丁度父より少し下の同僚で、同地の別荘に来ていた佐藤進軍医総監（初代順天堂の主）や佐々木東洋というような大家たちの診察施薬をうけたがとにかく東京へ電報を打ち、母を呼びよせた。母は急いで駆けつけて来たが、夜中になると僕は苦しみに呻吟し、まるで眠れず、むずかかったりするので、隣室の迷惑をも気遣って母は僕をおんぶし、深夜の旅館の長い廊下を行きつ戻りつして眠らそうとする。

大打撃で骨と皮ばかりのように痩せ衰え、あまつさえ、東京から着いたばかりで疲れきっている母が七ツの僕を背負って何とか寝つかせることに一生懸命で、殆んど不眠不休で看護している。その母の骨ばった背中の上で、僕は母が気の毒で、可哀想でたまらず、母自身マイッてしまいはしないかと心配した。戸外では寒月の下を夜番が拍子木をたたいて、通りを流し、遠くへ行ったと思うと又近くなったりする。そのカッ、カッ、カ、カ、という拍子木の音が妙に寂しく、それが母の哀しみや、心配、労苦に対する同情と一緒にあって、「ああ人生って何という哀しく淋しい所か」と子供心に悲哀に堪えず、母の背の上で僕は泣いた。そのくせ甘ったれで、母好きすぎて、一つ時も母をそばから手離せず、おんぶしていた時の思い出は痛切であった。

そんな風に意気地のない弱虫の甘ったれだった僕も、その後、父母の熱心な加護と注意によって、肝油、鉄剤などを服まされたことも効いてか、だんだん丈夫になったが、臆病だけは容易になおらず、上杉謙信の幼少時代の伝説的昔話などをよむと、その豪胆不敵な点にすっかり感心し、どうかして自分も人やものを怖れない人間になりたいと念じた。勇気があるということが僕の半生以上を通じての理想であつたともいえる。

鎌倉で姉の事件があつた当時は丁度、日清戦争が始まつて間もなくで、隣りの海浜院かいひんいん（後のホテル）に宿泊中の外人たちの話によると、日本は到底シナには勝てっこなく、その中シナの軍艦がこの相模湾の沖に来て艦砲射撃をするだろうと噂していた。何しろ東京の新聞は来ず、横浜に入る外国新聞が鎌倉に来て、その予想の記事がホテルのだれかから伝わるのを聞くばかりだったのが、姉の死で八月半ば東京へ帰って見ると、話はまるでちがひ、日本の連戦連勝の模様が錦絵にまでなっている。小学への入学は病気のため一年おくれて、翌年（たしか明治廿八年）だったが、入学するなり「雞とりの林に風立ちて」という軍歌を唄わされる始末だった。戦争で多勢の人間が国のために死んで行くという事実と、世間の戦勝気分とは一家の者の哀しみを余程まぎらしたと同時に、僕もめそめそ気が弱くては駄目だ。強くならなければならぬと思わされた。

ところが、その日清戦争が終ると間もなく、上から二番目の兄の友達の黒屋という人が父に会いに来て時局談をしている。その中で、今度は日露戦争の起ることが必至だ。そういう情勢に詳しい者から聞いたとか、不安な顔で話すのに、父も顔を曇らせていた。わきでそれを聞いた僕は早速世界地図を見ると、ロシアは世界一の大国で、しかもシナ人とはちがひ、ヨーロッパ人の国である。日本とは象と鼠くらい大きさがちがうように見えるので、これは大差だとすっかり心配し、怖しくなった。何しろ西洋人と

いうものは、アジア人より何かにつけて文明が進んでおり、強力であると思ひこんでいたのだった。その恐怖が実現した十年後には父はもう世を去っていたが、ぼくが父と別れたのは数え年十五歳のとき、父は数え年の六十五歳であった。物どころ附いてから、父に接したのは十年そこそこだが、何分、ぼくは父が五十一歳、母が四十歳のときの末子だから、父母にとっては孫のような感じだったらしい。

兄は四人いて、上の兄たちには大体無頓着な方の父も、たまには何かと実のある話もしたようだが、稚い僕には面白い話のしようもなかったらしい。そういうわけで、父との交渉らしい交渉は正味七、八年の記憶だと思ふが、にも拘わらず僕の父に対する印象は非常に深く、自分が歳をとるに従つて自らつくづく自分を父の子だと、よく思うことがある。

だれしも生まれついた素質、性格は各人各様で、若いうちはそんなことは余り問題にならないが、歳をとるにつれ、両親のどっちか或いは両方に似てくるもの、その家の伝統的な血が身に泌み出てくるもの、のようで、更にまた、父親が軍人や政治家であつたりすれば、その子供は商人らしいところはないのが常で、実業家の子が商人の子と肌が合い、坊主や学者の子は軍人や商人の子とは肌が合はぬ。どうもとかくそのようになってゆくものらしく思ふ。

けれども、例えば医者や軍人の子で哲学者や宗教家や芸術家になつた者はいるが、これは概していえばその両親のどっちかに、そういう素質が潜在していたからで、もちろん「鷹が鷹を産む」ということはあつても瓜の蔓に茄子はならぬというのが大体にいつて普通の事実と思ふ。殊に動植物の場合、血統というものはテキメンで、「種」の優劣は決定的に争えない。人間の場合は、血統だけではどうにもならぬものがあり、複雑な変化がいろいろ起るが、ぼくなど経済観念の發達していないのは、父の弱点だけを受け継いだものと思ふ。母もあくまで士族の女らしかった。

それはともかく、僕の我儘は生得のものにちがいないにしろ、上に述べたいろいろの事情が加わって煽られたもので、母が末子の僕を特別に溺愛し、すぐ上の姉や兄達に対する程度とは段ちがいの不公平だと自分ながらよく思い、兄や姉に同情した記憶がある。

臆病なくせに甘やかされてそんな風に育ってしまうと、みんなが自分を愛さないと満足しないことになり、しかも他人からは全く手におえないいたずらっ子、我儘な、そして変に理窟っぽく嫌や味をいつたりするくせに好色的な所のあったりする子が可愛がられるわけではない。その点すぐ上の兄裕吉は見た目も色白のくりくりと肥った、性質も僕とは正反対の少しコケットな性でもあった。四ツの年から叔父の家へ養子に行き、そこで苦勞していることに同情もされて、皆から愛されているのが嫉ましかった。嫂や家の女中達も「裕ちゃん」「裕ちゃま」とその兄をちやほやし、両親から十二分に愛されている僕に対してはその必要もないと思つてか、好意を示さないことがこつちには又直ちに敏感に通じ、その不満から「邪推深い」とよく女中達からいわれた。「邪推深い」とは何のことか意味はよく判らないなりにどうせよくないことだと感じた。

しかし家の中にいろいろの変化や不幸がおこった頃から子供の僕の魂も漸く少しずつ成長し、温室の中で育てられたような人生に対する甘い気持はだんだん砕かれ、持っていられなくなつた。

それにつけても思い出されることはいろいろあるが、まだ家のなかが穏やかで、長兄称吉がドイツから帰朝したときの土産のなかに五角十二面体だったかの青いガラスの文鎮があつたが、それで遠くを透かしてみるとなんでもないものが非常に綺麗にみえた。それからまた、むかしから家に在った双眼鏡をアベコベにして庭の彼方などを覗くと、庭の隣りの畑が果しなく遠くに見え、あの先にはどんな所があるのだろうか？ とお伽噺のような空想が起つたりした。